

弥生時代ものづくり集団？

木製品加工用の工具製造か

中野市上今井の南大原遺跡で見つかった約2千年前の鉄製品に、その後の分析で加工途上の痕跡があるとみられることが、15日までに県埋蔵文化財センター（長野市）への取材で分かった。木製品を加工するために用いられた鉄製工具を作ろうとしていた可能性もあるという。遺跡内には東日本では珍しい、鉄製品を作っていた痕跡もあり、同遺跡が「ものづくり集団」のムラだったとも推測できるとしている。

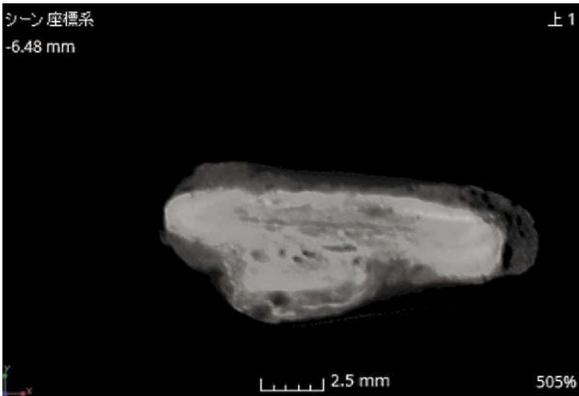
同センターが2019年4月～20年1月に行った第5次発掘調査で弥生時代中、後期の鉄製品2点が出土。長さ4・9センチと2・3センチで、さび付いて輪郭がはっきりしなかったが、県立歴史館（千曲市）で20年10月にエックス線撮影したところ、小さな鉄板を折り返したり、切断したりした痕跡が見つかった。

鉄製品考古学研究の第一人者で、愛媛大の村上恭通教授（東アジア考古学）は「興味深い発見。小型ナイフの可能性があり、現地でも作られる」と指摘。弥生中期の鉄の加工は九州など西日本が中心で、東日本ではこれまで類例がないという。

弥生人は土器の他に木製のわんや皿を使っていたことが分かっている。同センター調査部長の川崎保さん(55)は「鉄製品という伐採用のおのや、矢尻や剣などの武器を



中野・南大原遺跡 鉄製品に加工の痕跡



南大原遺跡で見つかった鉄製品のエックス線断面画像。鉄板2枚が重なっているのが分かり、折り返すなど加工途上の段階と想定される（県埋蔵文化財センター提供）



南大原遺跡から出土した鉄製品（県埋蔵文化財センター提供）



南大原遺跡 千曲川流域の自然堤防上にある。第4次（2011～13年）までの発掘調査で弥生時代中、後期の集落跡が確認された。第1次（1950年）では地元の歴史研究者、神田五六（ごろく）（1896～1964年）が弥生土器を発見。第4次では弥生中期の板状の鉄製品と鉄の矢尻が出土した。住居床面に火を強く受けた場所があり、砥石（といし）なども出たため、竪穴建物跡内で鉄器を加工していた可能性が浮上。第5次では、その証拠となる小さな鉄くずを見つげるため、全ての竪穴建物跡の土をふるい、磁石を当てる作業を続けた。

南大原遺跡の竪穴住居跡で見つかった火床。鉄の加工が行われた痕跡と考えられている。2019年10月、中野市（県埋蔵文化財センター提供）

南大原遺跡 鉄製品に加工の痕跡

こんせき

解答例

年 組 名前

中野市の南大原遺跡で見つかった鉄製品に、加工途上の痕跡があるとみられることが、県埋蔵文化財センターの調査で分かりました。記事と写真から、弥生時代の人々のものづくりについて考えてみましょう。

①同遺跡で見つかった鉄製品は、何年前のものですか。

【解答】 約2千年前

②県立歴史館でのエックス線撮影で、鉄製品にどんな痕跡が見つかったのですか。

【解答】 小さな鉄板を折り返したり、切断したりした痕跡

③遺跡から出土した長さ1センチほどの鉄片は、どんなものだとみられますか。

【解答】 鉄製品を加工した際に出たくず

④同センター調査部長の川崎保さんは、出土した鉄製品について、何に用いていたのではないかと話していますか。

【解答】 石器では向かない木製品の加工具として

⑤川崎さんは、どんな人々が移動してきたのではないかと推察していますか。

【解答】 木材や鉄などの加工に一連の技術体系を持つ大規模集団